

白居易詩にみられる「誰家」をめぐって

——特にその俗語用法に關するノート——

埋 田 重 夫

〔一〕

數百年に及ぶ白詩評價史のうえで、「白俗」は最も一般的な評語として定着している。彼の詩風のいかなる要素を“俗”(su)と認定するのかわという問題は、その文學の本質・根幹に直結しているだけに、難しい側面を含んでいると言えよう。こうした特色をもつ白居易詩を讀んで、感覺的にまず理解されることは、彼が積極的かつ持續的な意志によって、俗語を多數使用しているという事實である。唐代の人々が日常生活で用いていたであろう口語系語彙を、詩のなかに導入するという傾向は、杜甫などの作品にもしばしば認められるものであるが、その種類と量の多さから言つて、白居易は極めて特異な相 (aspect) を示している。彼は何故にそれほどま

で白話系語彙に執着したのであろうか。それらの問題を考察する觀點としては、①白居易詩にみられる俗語を全體的・包括的に論ずるもの、②白居易の用いる幾つかの俗語を相互に關連させて論ずるもの、③彼において特徴的な個々の俗語を個別的に論ずるもの、という三つの分類設定が可能であろう。総合的な白居易俗語論の完成には、①②③に示した視點をそれぞれ有機的に連結させることが望ましいが、本稿では主として③の觀點から特に「誰家」(shuǐjiā) という詩語を取り上げて、白居易の俗語使用の一端を考えてみたいと思う。

「誰家」は一つの單語のなかに文言用法と白話用法とが併存しているという點で、「顔色」(yánsè—yánsè) などのことばと非常に共通した性格を有していると判斷される。しか

白居易詩にみられる「誰家」をめぐって (埋田)

し「顔色」に含まれる「カオノイロ」「イロ」という語義の區分が、文脈(コンテキスト)によって十分に識別可能であるのに對して、「誰家」の場合は、「ダレノイエ」という基本義と「ダレ」という派生義とが同心圓的に重なっているため、語義の境界線が不明瞭なままに存在していると言えよう。従前出版された白居易詩注釋書や唐詩注釋書における「誰家」の注釋・解釋が、相對的に不安定な部分をより多く残していることや、現在までに詩語論・俗語論としての「誰家」論文が認められないことは、基本的にはこうした語義區分の不明確さに因つていふと考えられる。

この度は、白居易が俗語用法としての「誰家^{だれ}」を用いることで、どのような詩的表現効果を志向したのかという問題を中心にして、この詩語の形成と展開の諸相を考えてみたいと思う。そうした詩的表現効果がたとえ彼にとってではっきりと自覺されたものでなかったとしても、その意味を考察することは、やはり白居易論として不可避的な問題の一つであろう。詩人論としての意味づけを基本課題にしつつ、併せて「誰家」の文言用法と白話用法を識別する複數の尺度^{さくど}を、自分なりに整理して提示したい。

〔二〕

現代中國語において「家」が接尾辭化する例は、「大家」(dàjiā)「人家」(rénjiā)「咱家」(zánjiā)のような人稱表現や、「孩子家」(háizijia)「學生家」(xuéshengjiā)「女人家」(nǚrénjiā)「姑娘家」(gūniangjiā)「女孩兒家」(nǚháirjiā)などの年齢・職業・性別に關した表現にしばしば認められるものである。このほか「普通話」以外で用いられている表現などを算入すれば、虛詞化した「く家」「家く」の用例はさらに多様なものとなるだろう。しかし白話用法「誰家^{だれ}」に限つて言えば、現代の中國人が——特に日常生活において——この語を「誰」「什麼人」「任何人」の意で用いる頻度は、極端に少ないと思われる。京劇に代表される戯曲や各地の諸方言で使われるケースを考慮しても、現代中國語における人稱疑問詞「誰家^{だれ}」の普及率・浸透率は、それほど高いものとは言いがたい状況にある。こうした點を踏まえて『中國語辭典』(鐘ヶ江信光、大學書林、一九五八年四月)、『現代中國語辭典』(香坂順一、光生館、一九八二年三月)、『熊野中國語大辭典』(熊野正平、三省堂、一九八四年十月)、『中日大辭典 増訂版』(愛知大學中日大辭典編纂處、大修館書店、一九八六年四月)など

の現代語辭書が、「誰家」の項で、みな一様に「①だれの家、②だれ」と簡単な敘述を繰り返すのは、全く理由のないことではない。

國內外で出版された主な現代中國語辭書・古典中國語辭書類で、比較的詳細な説明を加えるものとしては、以下の三書が注目される。中國の代表的な辭書である『辭海』『辭源』（ともに一九七九年度版）『現代漢語詞典』（一九八三年度版）が、「誰家」の項目すら設定していないのに對して、これらの諸書は、文言・白話各用法をそれぞれに類別し、さらに複数の用例を提示しており、その記述内容は十分に留意されたい（引用順序は任意）。

- ① 「shéijiā 誰家〔指〕誰の家、どの家だつて shéijiā〔指〕誰か、誰だつて」（倉石武四郎『岩波中國語辭典』〈岩波書店、一九七五年九月〉）

- ② 「①たが家。たれの家。何家。「樂府、蒿里曲」蒿里誰家地、聚斂魂魄無賢愚。〔劉廷芝、代悲白頭翁〕洛陽城東桃李花、飛來飛去落誰家。②たれ。家は、人家の家に同じく、添辭。〔寒山、詩〕誰家長不死、死事舊來均。〔白居易、續古詩〕誰家無夫婦、何人不離析。」（諸橋

白居易詩にみられる「誰家」をめぐる（埤田）

轍次『大漢和辭典』〈大修館書店、一九七六年七月〉

- ③ 「shuíjiā ①甚麼人家的家、如“飛來飛去落誰家？”（劉廷芝・代悲白頭翁）、②甚麼人、如“誰家解事眼？”（張鷟・遊仙窟）、③怎樣、如“年少病多應爲酒、誰家將息過今春？”（王建・寄劉賁問疾詩）、④怎能、如“更遣將詩酒、誰家逐後生？”（韓愈・杏園送張徹侍御歸使詩）」（教育部重編國語辭典編輯委員會編『重編國語辭典』〈臺灣商務印書館、中華民國七十一年二月〉）

①は「ダレノイエ」という基本義と「ダレ」という派生義との識別区分を、「家」(jiā)字の輕聲現象の有無に求めている點で注意される。「誰家」(shuíjiā 誰の家・shuíjiā 誰)を「地方」(dìfāng 地方・dìfāng 場所)「東西」(dōngxī 東西・dōngxī 品物)などの單語と共通の性格をもつことばとして捉えているわけである。②については、典型的な文言系辭書であるためか、俗語用法に對して具體的な説明を加え、「寒山」と「白居易」の詩例を引用していることが注目される。特に『大漢和辭典』が、白話用法の先行例として白居易詩を引くことは、後述のごとく、彼の「誰家」例に多數の白話用法が確認できることから興味深いものと言える。③

に至ると引用例がさらに豊富になり、しかも「誰家」を「怎樣」「怎能」などのいわゆる「估量辭」⁽⁵⁾としても位置づけしており、このことばがもつ語義上の多様な相を示唆する結果ともなっている。

これら①②③の記載傾向から判断されることは、「誰家」ということばが、文言・白話、双方の用法についてみた場合でも、現代の日常生活で多用されるものではなく、依然として「古典色」の強い語であるという事實である。②③に引用された事例が、全て唐代の詩文であることは、このことを傍證している。同じ「古典語」として出發した「顔色」(yánsè)の語義のうち、特に白話(俗語)用法「イロ」が現在でも中國人の言語生活に深く根をおろして使われているのと極めて對照的であると言える。こうした事柄を前提にして、中國歴代の主要な字書・韻書が「誰」「家」兩字について、どのような解釋をしているのか、通時的に再度確認しておきたいと思う。古代知識人による傳統的な「訓詁」がどのように祖述されているか確認することは、「誰家」という古典語の成り立ちを考えるうえで、やはり不可欠な作業であらう。

①(7)「誰、誰何也。」(『說文解字』第三篇上)

(1)「家、尻也。从宀狴省聲。」(同右、第七篇下)

②(7)「誰昔、昔也。」(郭璞注)誰、發語辭。『爾雅』上、釋訓第二

(1)「宮謂之室、室謂之宮、牖戶之間謂之扃、其內謂之家。」(郭璞注)今人稱家義出於此。(同右、中、釋宮第五)

③(7)「誰、是推切、何也。不知其名也。」(『玉篇』卷九、言部第九十)

(1)「家、古牙切、居也。家室也。」(同右、卷十一、宀部第一三八)

④(7)「誰、何也。視佳切。」(『廣韻』上平聲卷第二)

(1)「家、居也。爾雅云、扃內謂之家。又姓。風俗通、漢有家羨爲劇令。」(同右、下平聲卷第二)

⑤(7)「誰唯、視佳切。說文、何也。或从口。」(『集韻』平聲二)

(1)「家窮家、說文、居也。爾雅、牖戶之間謂一扃、其內謂之家。古作窮家。」(同右、平聲三)

これらを通覽してまず第一に指摘されるべきは、「誰何」という語に示されるごとく、「誰」と「何」とが連結して用

いられ、また意味上「互訓」ともなっている點である。漢代、許慎の『説文解字』に「誰何也」と述べられてより、後世の大多數の韻書はその記述をそのまま直截的に繼承している。このように「誰」字が示された時、無意識的・必然的に「何」字が想起されるという觀念傾向は、唐詩の世界で最も機能的に展開される「誰家」の對句（對偶）ヴァリエーション⁽¹⁰⁾を考へるうえでも、十二分に留意される必要がある。唐代詩歌作品で常用される「誰家」と「何處」との組み合わせは、基本的にはこうした兩字の互訓性——相互置換性——に依據しているわけである。第二に注意されるべきは、「誰家」の問題と直接かわりをもたないが、②『爾雅』に示された「誰昔」の用法である。「誰」字が發語辭となつて虚辭化する現象は、中國訓詁學（史）においてやはり興味ある事例の一つである。既に『詩經』陳風、墓門に「墓門有棘、斧以斯之。夫也不良、國人知之。知而不已、誰昔然矣。」とあるところから、リズムを整える語助詞としての用法は、かなり早い時期から定着していたであらうことが推測される。

以上、辭書レベルでの関連資料を中心にして、「誰家」（「誰」or「家」という單語の基礎的な性格を確かめてきた。この語が基本義としての「ダレノイエ」、派生義としての「ダレ」

白居易詩にみられる「誰家」をめぐって（埋田）

をそれぞれ包含していることは、詩語として成長發展していくための絶対條件となつていふと思われる。以下の各章では、辭典の割り出す平均値としての「誰家」ではなく、個性的かつ具體的な文學作品のなかで、この語がどのような位相を示しているか、時代順にみていきたいと思う。

〔三〕

現存する先秦期から隋代までの詩歌に詠い込まれる「誰家」は、合計二十例検出される。古代文學の双璧たる『詩經』『楚辭』には用例が皆無であり、ことばが詩語として本格的に多用され始めるのは、漢代以降のことと考えてよい。

儒家の經典である『十三經』（葉紹鈞編『十三經索引』へ中華書局、一九五七年十一月）にあつても、『左傳』の「誰氏之五官也」（昭公二十九年）、「人誰不死」（昭公二年、二十五年、定公十四年）、「人誰納我」（僖公四年）、「人誰無過」（宣公二年）の諸例が見出せる程度であり、「誰家」が古代文獻における「常套語」であつたと判斷するには無理があらう。

近年、刊行された邊欽立輯校『先秦漢魏晉南北朝詩』（上・中・下）（中華書局、一九八三年九月）に基づいて調査した場合、その用例数は「漢詩」三例、「魏詩」一例、「晉詩」二

例、「宋詩」二例、「梁詩」七例、「陳詩」四例、「隋詩」一例という状態にある。⁽¹²⁾これら二十例を中核として漢魏六朝詩の用法を検討していくと、それらの諸例に共通した幾つかの際立った傾向を知ることができる。

唐以前に詠われる「誰家」については、以下に示す四つの點が特に注目される。その第一は、二字二音節で「誰」を示す「阿誰」「人誰」「何人」「誰氏」などの單語が、樂府詩のなかに多數認められるようになる點である。とりわけ俗語としてのニュアンスをより強く含む「阿誰」(接頭語「阿」プラス「誰」)は、十例近くも用いられており、しかも各時代を通じて平均的に使われている。「ダレ」を指示する複數の二音節單語が漢・魏・晉・齊・梁の各詩歌作品にしっかり定着していることは、中國中世詩歌史における「誰家」の用法を考察する際に、どうしても確認しておかねばならない事柄であろう。第二點は、この時期の「誰家」が全て例外なく對偶(對語)形式を採用しないことである。大多數の唐代詩人が試行した「誰家〴〵何處〴〵」「誰家〴〵幾處〴〵」などの對偶パターンは、六朝期の詩人たちからはほとんど完全に無視されている。こうした現象はおそらく律詩・排律といった對句を根幹とする近體各種詩型が、唐代に到ってはじめて完成されたこ

とに因つていよう。對句(對語)表現の重視と實踐は、必然的に「誰家」に對應する單語を多樣化させる結果ともなったと言えるわけである。そしてここでさらに重要なことは、唐代の詩人たちが「誰家」に關したさまざまな對偶表現を、近體詩のみならず六朝傳來の古體詩(樂府詩)の領域でも積極的に試行している事實である。「誰家」の對語化という問題は、漢魏六朝詩と唐詩における用法を決定的に分離するポイントであるだけに、大いに注視されねばならない。漢魏六朝詩の「誰家」用法の特色として三番目に言及されるべきは、この語が多くの場合——二十例中十七例に達する——人間を形容する修飾語として使用されている點である。總數から言えば、男性よりも女性を形容するケースが壓倒的に多い。

(1) 男性を形容するケース

- ① 「借問誰家子、幽并游俠兒。」(曹植「白馬篇」、^{卷六}「魏詩」)

- ② 「玄爲誰翁子、道是誰家兒。」(張華「詩」、^{卷三}「晉詩」)

- ③ 「可憐誰家郎、緣流乘素舸。」(謝靈運「東陽溪中贈答詩二首、其二」、^{卷三}「宋詩」)

④「問是誰家子、宿衛羽林郎。」(隋煬帝「白馬篇」、「隋詩」卷三)

②女性を形容するケース

①「不知誰家子、提籠行採桑。纖手折其枝、花落何飄颻。」(宋子侯「董嬌嬈詩」、「漢詩」卷七)

②「問此誰家姝、秦氏有好女。」(樂府古辭「陌上桑」、「漢詩」卷九)

③「夜聞擣衣聲、窈窕誰家婦。」(清商曲辭「月節折楊柳歌十三首、八月歌」、「晉詩」卷十九)

④「可憐誰家婦、緣流洒素足。」(謝靈運「東陽溪中贈答詩二首、其二」、「宋詩」卷三)

⑤「誰家女兒對門居、開顏發豔照里閭。」(梁武帝「東飛伯勞歌」、「梁詩」卷一)

⑥「不知誰家子、看花桃李津。白雪凝瓊貌、明珠點絳唇。」(江淹「詠美人春遊詩」、「梁詩」卷三)

⑦「誰家女子能行步、反著袂裌後裙露。」(橫吹曲辭「捉搦歌四曲、其二」、「梁詩」卷二十九)

⑧「青樓誰家女、開窗弄碧弦。」(吳尚野「詠鄰女樓上彈琴詩」、「陳詩」卷九)

白居易詩にみられる「誰家」をめぐって(埤田)

「誰家」が女性一般を形容する例は②の①～⑧の他にも、
 (1)「誰家妖冶折花枝」(梁、劉孝威「擬古應教」、(2)「誰家總角歧路陰」「誰家妖麗隣中止」(梁簡文帝「東飛伯勞歌二首、其一・其二」、(3)「誰家佳麗過淇上」(陳後主「東飛伯勞歌」、(4)「誰家玉顏窺上路」(陳、陸瑜「東飛伯勞歌」)などの「美人」「美女」をさし示すケースもあり、それらを合計するとかなりの數量になる。男性もしくは女性を特定する六朝詩の「誰家」は、全て文言用法としての「ダレノイエ」「イズレノイエ」であって、ほとんど固定した常用表現となっていたことが理解される。また「誰家子」という慣用表現は、男性・女性の両方にまたがって出現しているが、これもやはり基本義としての文言用法であることに疑問の餘地はない。これらの諸例は、全て「場所」(place)としての「誰家」(だれのか)があつて「人」(person)としての「誰家」ではない。

ところで唐以前の詩歌において「家」(jia)が助字化した俗語用法は、いったいどの時代まで溯源することが可能なのであろうか。ここで検証されるべき第四點は、六朝期の韻文作品のなかに白話用法の「誰家」が存在するかどうかという問題に絞られてくる。既述したごとく、前期中世詩の「誰家」が嚴密な對句構造をとらないことから、文言系か白話系

かを認定する唯一の基準は、當然その作品内における「文脈（コンテキスト）」に求められねばならないだろう。そうした立脚點に據ると、確實な白話（口語・俗語）用法の「誰家」初出例としては、まず第一に漢代の樂府古辭「梁甫吟」を挙げねばならない。

歩出齊城門
遙望蕩陰里
里中有三墳
纍纍正相似
問是誰家墓
田疆古冶子
力能排南山
文能絕地紀
一朝被讒言
二桃殺三士
誰能爲此謀
國相齊晏子

歩して齊の城門を出で
遙かに蕩陰里を望む
里中に三つの墳有り
纍纍として正に相ひ似たり
問ふ是誰家の墓ぞ
田疆と古冶子なりと
力は能く南山を排し
文は能く地紀を絶つ
一朝 讒言を被り
二桃 三士を殺す
誰か能く此の謀を爲す
國相 齊の晏子なり

「梁甫吟」は『古文苑』卷八、『樂府詩集』卷四十一、『藝

文類聚』卷十九などにも採録されており、一般には諸葛亮の作として通行している有名な詩篇である。各テキストによって「古梁父吟」「梁父吟」と詩題を異にしていることや本文に文字の異同が多少認められる點を別にすれば、全體の内容や傍點部分の「誰家」兩字は各本ともに共通している。詩の内容は田開疆・古冶子・公孫接の三勇士が、齊の宰相晏嬰の策略によつて殺されたいわゆる「二桃殺三士」の故事を詠っており、最終的には、才子らを死に追いやつた晏子への批判を基調にしている。ところで本詩五句目にみえる「誰家」は、「墓」という普通名詞に結合して用いられており、六句目にはその墳墓の主である人名（固有名詞）が二つ並記されている。この「文脈（コンテキスト）」では「誰家」を「場所」の意で解釋することは困難であらう。「梁甫吟」の「誰家」が「何人」とほとんど同じ意味で詠われていることは否定できないと思われる。⁽¹⁵⁾先に紹介した「誰家プラス人」という表現とはかなり違つたものとして位置づけるのが妥當であらう。漢代の「梁甫吟」に見られる俗語的用法はその後、唐代まで全く見出すことができない。ただ『文選』卷二十三に收載する晉、張載の「七哀詩二首、其一」には「北芒何壘壘、高陵有四五。借問誰家墳、皆云漢世主。」とあり、「梁甫

吟」と極めて類似した表現となっている。しかし「借問・誰家・墳 jièwèn・shuíjiā・fén」「皆云・漢世・主 jiēyún・hànshì・zhǔ」という句讀リズムから言えは、「誰の家」は「漢の世」に對應しているわけであり、俗語用法の「誰家」と即断するには問題が残ろう。文言と白話の兩用法に解釋できる中間的な作例として處理するのが最も自然であるかも知れない。唐、徐堅らになる『初學記』（卷第十四、死喪第八の條）が該當箇所を「誰人」に作る「七哀詩」を引用することは、一面でこの用例における兩用法の「揺れ」を暗示するものだと言えなくもない。

このように見てくると、唐以前の詩歌作品に關する限り、「誰家」用法の主流は第一義・基本義としての文言系であると結論づけられよう。「文脈（コンテキスト）」から確實に白話系用法と見なし得るのはわずかに漢代の「梁甫吟」一例に止まる。現在にまで傳承される漢魏六朝詩の絶對數が限定されていることを考えても、俗語用法の「誰家」の水脈は極々乏しいものであったと言つてよいであろう。この詩語がより多様な展開を見せるのは、唐代に入ってからのことである。唐詩における俗語用法の「誰家」に焦點をあてて、さらに詳しくみていきたい。

白居易詩にみられる「誰家」をめぐって（埴田）

〔四〕

唐詩における「誰家」用法は、文言・白話それぞれのレベルにあつて、漢魏六朝詩以上に複雑な様相を呈している。論證の手續きとしては、唐詩全體の使用概況をみたりえて六朝期の用法との異同を論じ、さらに個々の詩人——特に中唐の代表的詩人である白居易——の用例を考えていくのが一番効率よいであろう。まず『全唐詩』『全唐詩外編』と既刊の一字索引類を基礎資料として、「誰家」が各々の詩人によってどの程度用いられているのか確認しておきたい。引用する詩人は『全唐詩』の配列にならつてほぼ年代順に提示し、しかもその用例數が二例以上のものに限定した。⁽¹⁸⁾従つて「誰家」を一例のみ用いる多數の詩人の存在を考えると、全體の用例數は約三倍となる。

- ①盧照鄰(2)、②劉希夷(2)、③王維(3)、④王昌齡(2)、⑤崔顥(2)、⑥李白(13)、⑦韋應物(2)、⑧杜甫(11)、⑨錢起(3)、⑩顧況(2)、⑪戴叔倫(2)、⑫李端(2)、⑬司空曙(2)、⑭王建(5)、⑮于鵠(2)、⑯楊巨源(2)、⑰韓愈(2)、⑱劉禹錫(3)、⑲孟郊

- (2)、²⁰張籍(9)、²¹盧仝(2)、²²李賀(4)、²³白居易(36)、²⁴施肩吾(2)、²⁵張祜(4)、²⁶雍陶(2)、²⁷杜牧(7)、²⁸許渾(3)、²⁹李羣玉(2)、³⁰司空圖(4)、³¹張喬(2)、³²來鵠(2)、³³羅鄴(2)、³⁴秦韜玉(2)、³⁵吳融(2)、³⁶韋莊(4)、³⁷曹松(2)、³⁸李建勳(2)、³⁹李中(4)、⁴⁰成彥雄(2)、⁴¹寒山(3)、⁴²馮延巳(4)、⁴³李鄣(2)

概観してすぐ氣がつくことは、中唐詩人の白居易が三十六例という際立つて多數の作例を示していることである。⁽²⁰⁾傳承される詩數が一〇〇〇首を超える李白・杜甫でもそれぞれ十三例、十一例(そのうち確實な俗語用法は各々一例)に止まつてゐる。しかもここでより注意されるべきことは、白居易が文言用法としての「誰家」を多用しながら、また同時に十例近い白話用法をも試行している事實である。この意味からも白居易詩に現われた「誰家」を分析検討することは、そのままストレートに唐詩全體におけるこの詩語の實像を把握することにもなるであらう。他の大部分の詩人における「誰家」例が數例しかなく、しかも俗語用法を導入する姿勢が數量的にほとんど認められないからである。

漢魏六朝期の「誰家」との比較という點から考えてみた場合、相對的に唐詩における用法は、①「何人」「誰人」「阿誰」「誰氏」「伊誰」などの人稱疑問詞の大量出現、②「家」を接尾辭(盧詞)化させた「農家」「兒家」「自家」「渠家」「人家」などの多用、③音數律の流行が五言體から七言體へと移動したことに伴つて、「誰家プラス人」表現のヴァリエーションが前代より一層多樣化したこと、④六朝からの傳統詩體である「樂府詩」を中心にして、五古・七古・雜古の各樣式にも依然として「誰家」が詠われていること、⑤近體詩型(特に律詩・排律)の成立によつて、「誰家」をめぐる對句パターンがさらに複雑化したこと、⑥「誰家プラス動詞」という唐以前にはほとんどみられなかつた表現形式の出現、⑦俗語用法「誰家」が、白居易を一つのピークにして複數的——散發的——に認められるということ、の七點にだいたい集約できそうである。本節では⑦を議論の中心課題にしつつ、併せて白居易詩における「誰家」の諸相を深く掘り下げて考えてみたい。

前述の「梁甫吟」にみられるような俗語用法としての「誰家」は、六朝期の不盛行を受けて、初唐・盛唐の詩人たちからほとんど無視されている。唐代前期を代表する王績・駱

賓王・陳子昂・杜甫・李白・王維・孟浩然らの主要用法は全て文言系であって、俗語「誰家」は例外としての位置を占めているに過ぎない。白居易以前の作例で、「文脈（コンテクスト）」からほぼ確實に俗語用法と特定できるものは、左記に示す数例といった状態である。

- ①「人生貴賤無終始、倏忽須臾難久恃。誰家能駐西山日、誰家能堰東流水。」（盧照鄰「行路難」、『全唐詩』卷四十一）
- ②「長安甲第高入雲、誰家居住霍將軍。」（崔顥「霍將軍」，同右，卷二十三）
- ③「誰家玉笛暗飛聲、散入春風滿洛城。」（李白「春夜洛城聞笛」，同右，卷一八四）
- ④「吹笛秋山風月清、誰家巧作斷腸聲。」（杜甫「吹笛」，同右，卷三三）
- ⑤「水竹誰家宅、幽庭向苑門。」（樓穎「東郊納涼憶左威衛李錄事收昆季太原崔參軍三首、其一」，同右，卷二〇三）

初唐から盛唐にかけて創作された膨大な詩歌作品のなかから、俗語としての「誰家」がわずか数例しか検出できないことは、一つの詩語の俗語化（俗語形成史）という点で眞に興

白居易詩にみられる「誰家」をめぐって（埋田）

味深い現象と言える。「梁甫吟」以来の微弱な水脈は、李白・杜甫などを中心とした盛唐詩人群にもごくわずかにしか継承されなかったと判断されよう。唐の二大詩人たる李白と杜甫に俗語としての「誰家」が一例ずつしか認められないことは、この点を端的に示している。詩人個人の自覚は別として、語彙史上、俗語系用法の「誰家」の流れを擴大しこのことばに新たな可能性を加えた詩人は、中唐の白居易までほとんど見出すことができない。白居易における「誰家」用例数が三十六と傑出している點は、既にこの詩人にとってこの詩語が、特別な意味をもつものであったことを暗示している。白居易詩にみられる俗語の総合的研究は、その多様な文學のもう一つの側面を理解するうえで、どうしても無視できない重要な分野と言えよう。

白居易の詠う「誰家」は文言用法が多数を占めているものの、また同時にかなりの数の白話用法を指摘することができ、彼は二十六例の基本義と十例の派生義を併用しており、個々の「誰家」が詠われる場面はそれぞれに異なっている。總數三十六例のうち約三分の一にあたる十例が白話用法であることは、他の諸詩人が一個人としてせいぜい一例弱に止まっていることに比べて際立った數量であることが理解されよ

う。『白氏文集』七十一卷本に示される三千首近い作品量を考慮しても、白居易がこれだけの比率の俗語用法を詠っていることは、特に注意されてよい。彼はさまざまなコンテキストで「誰家^{だれ}」を使っている(各詩の配列は制作年代順)。

- ① 「杏爲梁、桂爲柱。何人堂室李開府……高其牆、大其門。誰家第宅盧將軍。」〔新樂府、其三十九、杏爲梁〕(0163)
- ② 「誰家無夫婦、何人不離拆。所恨薄命身、嫁遲別日迫。」〔續古詩、其一〕(0065)
- ③ 「誰家第宅成還破、何處親賓哭復歌。」〔放言、其四〕(0896)
- ④ 「赤玉何人小琴軫、紅纈誰家合羅袴。」〔喜山石榴花開〕(1165)
- ⑤ 「丘墟郭門外、寒食誰家哭。」〔寒食野望吟〕(0601)
- ⑥ 「誰家臥牀脚、解繫釣魚船。」〔臨池閑臥〕(2385)
- ⑦ 「水木誰家宅、門高占地寬。」〔題洛中第宅〕(2564)
- ⑧ 「谷口誰家住、雲肩鑲竹泉。主人何處去、蘿薛換貂蟬。」〔題崔常侍濟源莊〕(2606)

⑨ 「時逢過客愛、問是誰家住。此是白家翁、閉門終老處。」〔閑居自題〕(3007)

⑩ 「收貯誰家集、題云白樂天。」〔題文集櫃〕(3024)

唐代までの詩歌作品に出現する個々の「誰家」を對象にした場合、それが最終的に文言用法と白話用法のいずれに屬するのか判定するには、實は難しい問題が含まれている。「ダレノイエ」と「ダレ」という二つの語義がそれぞれ微妙かつ同心圓的に重複していることは、語義の決定を困難にする最大要因である。つまり單獨に「誰家・客」(shuíjiā・kè)と表現された時、「誰の家の客」と「誰の客」という二通りの解釋が可能なのである。「誰家」を含む句をめぐる、従来の白居易詩の注釋や解釋が不安定な部分を残しているのも、基本的にはこうしたことを原因としている。これらの懸案を解決するためには、文言・白話を判別する客觀的な基準・尺度の設定が改めて必要となつてこようが、「誰家」については④六朝以來の傳統的な表現手法(慣用表現)による判斷、⑤對偶(對語)構造による判斷、⑥文脈(コンテキスト)による判斷、の三點が最も有効なスケールとなるであらう。これら三つの尺度はそれぞれ單獨に獨立させて用いると言うよ

りは、むしろ相互に關連させるべきものであると思われる。

④～⑥のなかで最も重要なのは⑥であろうが、それを補足するものとして④⑤をうまく使用すれば、「誰家」の語義を決定することは、それほど難しくないのである。例えば先に示した白居易詩では、⑤⑥⑦⑧⑨⑩は「文脈（コンテキスト）」から、①②④は「對偶構造」と「文脈（コンテキスト）」からそれぞれ俗語系の「ダレ」と特定できよう。「誰家プラス（第）宅」「誰家プラス動詞（哭・臥・住）」の表現からみて、これらを「人間（Person）」ではなく「場所（place）」を指示する「誰家」とするには無理が伴うからである。また①④のごとく「誰家」が人稱疑問詞としての「何人」と嚴密に呼應しているものを、強いて「誰の家」と解するのは、一首全體のコンテキストに照らしても不自然である。さらにまた補足すれば、③の「誰家第宅成還破、何處親賓哭復歌。」は、純粹な「對句構造」をとりながらも、一首全體としては「文脈」がより優先されているケースとして、やはり「家」が助字化していると考えるのが適當であろう。「誰家」義を認定する基準として「對偶・對語表現」による判斷が有効なことは確かであるが、それが唯一の絶對的な尺度とはなり得ていない⁽²⁸⁾點はやはり大切なポイントと思われる。その他にも「捕蝗

白居易詩にみられる「誰家」をめぐって（埴田）

捕蝗誰家子」（「新樂府、其十二、捕蝗」〔0136〕）「借問誰家婦」（「夜聞歌者」〔0498〕）「誰家思婦秋擣帛」（「聞夜砧」〔1287〕）「誰家高墮、譬如雲」（「寄微之」〔1063〕）などの諸例は、いずれも漢代以來の樂府系古體詩のなかに多出する「慣用表現」（この家の）であることから、文言系の用法であると結論づけられよう。一般に中國古典文學では、ある一定の時間帶のなかで一度強固な典型が形成されると容易に變化しにくい傾向——いわゆる典型保存の傾向——が認められるが、こうした特色は詩語の領域において特に著しい。漢魏六朝の詩人たちによって確立された傳統的表現手法「誰家プラス（女性・男性）」は、唐代詩人にもほとんど全く屈折することなく受け継がれている。唐詩において文言・白話兩義に解釋可能な中間的作例の大部分は、これら「慣用表現」のスケールを應用することで解決できる場合が少なくない。

漢代から盛唐期まで極めて乏しい水脈であった俗語用法の「誰家」は、日常生活次元の語彙を詩中に採り入れることに熱心であった白居易という個性の出現によって、その幅と深みを急激に増大させる結果となった。文言・白話兩用法をもつ「誰家」の語彙・語法史において、白居易の存在は決定的である。彼は七十五年の生涯中、主として四十代から六十代

までの三十年間に、古體詩・律詩・排律詩型にこの詩語を多用し、その使用時期は白居易文學の圓熟期・完成期とはぼ重なり合っている。詩人としての人生が最も圓熟した時期に、彼がこのことばを集中的に用いていることは、單なる偶然と言ふべきものではない。一人の人間の傳記と一つの詩語の用例史とが微妙に對應していることは、やはり留意されねばならないであらう。

このように白居易によって急速に開發された「誰家」の白話用法は、杜牧・許渾などの晩唐詩人たちに繼承されていくわけであるが、その水脈は最後まで白居易以上の擴がりを見せることがなかったと結論づけられる。作品量を誇る著名な晩唐詩人にとつても、俗語としての「誰家」はそれほど魅力あるものではなかったやうである。①張祜（「將之會稽先寄越中知友」、『全唐詩外編』172頁）、②杜牧（「石池」、『全唐詩』卷526）、③許渾（「南樓春望」、『同卷529』）、④曹松（「寒食日題杜鵑花」、『同卷719』）、⑤潘佑（「失題」、『同卷738』）、⑥陳陶（「水調詞十首、其一」、『同卷746』）、⑦劉兼（「蜀都春晚感懷」、『同卷766』）、⑧寒山（「詩三百三首、其四十六」、『同卷806』）などにそれぞれ白話用法が認められるとは言つても、晩唐詩全體と詩人個人におけるその絶對用例數が極度に少ないことは、前述の指摘を客觀的に證據づけよう。

う。「誰家」の文言用法は漢代以來、一貫して變化することなく繼承されたものの、その白話用法は、中唐の白居易を一つの頂點とした以外には、初唐・盛唐・中唐・晩唐の無數の詩人たちからもほとんど關心を向けられるものではなかったやうである。中國中世詩歌史において、俗語としての「誰家」の水脈が、白居易を唯一の例外として微弱なままであり續けたことは否定できない。この點からも詩語「誰家」と詩人白居易との關係は、非常に重要な意味を含んだものと考えられよう。

[五]

本稿では詩語「誰家」の形成とその展開を概觀しつつ、同時に白居易におけるこのことばの位相について考察をめぐらしてきた。それら主要な論點をここで整理すると、おおよそ以下に示す七項目に歸納できるだろう。

①「誰家」(shuíjiā)という詩語には、古典色の強い基本義としての「ダレノイエ」(場所を指示)と俗語色の強い派生義としての「ダレ」(人間を指示)の兩用法が認められるが、詩歌における白話系用法の淵源は、ほぼ漢代

の「梁甫吟」にまで溯ることができるといふこと。

②しかしそうした白話系の語意・語法は、漢魏六朝詩の作品世界においてほとんど例外的な地位を占めているに過ぎないということ。

③「誰家、何處」といった對語・對偶パターンは、六朝期の作品には極めて少なく、この語を對句構造のなかにとり込む傾向は、近體詩（特に律詩・排律）の確立した唐代に入ってからだと判斷されること。

④唐詩における「誰家」は、文言・白話双方の用法において多様な表現ヴァリエーションが認められるが、その最大の要因は「七言音數律」(○・○・○・○・○・○・○)の流行であると考えられること。

⑤唐代詩人であつて最も「誰家」を多用するのは白居易（三十六例）であり、俗語用法も十例と際立った數量を示している。このことから彼における用法は、そのまま唐詩全體の「誰家」用法をも——極めて集約的に——代表する結果になっているということ。

⑥中唐以前の「誰家」の不盛行は、白居易の出現によって大きな轉換期を迎えたが、しかしそれは、彼一個人による積極的な嗜好を意味したに過ぎず、中唐詩壇を形成す

白居易詩にみられる「誰家」をめぐる（埤田）

る元稹・劉禹錫・李紳・韓愈・孟郊・賈島・柳宗元などの諸詩人にもほとんど全く引き繼がれるものではなかったということ。そしてさらにその乏しい水脈は唐末宋初まで變化することなく續いたということ。

⑦「誰家」の文言用法・白話用法を識別するための客觀的な尺度（スケール）としては、④六朝以來の傳統的な表現手法（慣用表現）による判斷、⑤對偶・對語構造による判斷、⑥文脈（コンテキスト）による判斷、の三點が最も有効であろうが、これらの基準はそれぞれ一つ一つ獨立させて用いるべきものではなく、むしろ相互に——有機的に——關連させて、優先順位の高いものから使用されるべき性格にあるということ。

このようにみると、白居易の詩語「誰家」に對する執着・執念・創意・工夫は相當のものであることが理解されよう。白居易文學におけるその特異なアスペクトは、このことばの語彙史（俗語形成の歴史）に照らして考えた場合、直にはつきりしてくる。詩語として「誰家」と「誰家」をそれぞれ併用することで白居易がどのような詩的表現効果を追究したのか——あるいは追究したと考えられるのか——という問

題は、その文學を言語面から考究するうえでどうしても把握しておかねばならないものである。

この問題を考察する際の最大のポイントは、結局のところ、一語義二音節化（現象）がもたらす詩的表現効果という點に絞られてくるであろう。「一字」＝「一音節」＝「一概念」を原則とする「漢語」（Hanyu）の古典詩のなかに、一義二音の口語的「誰家」（shui.jia）が配置された場合、「家」（jia）の助字化によってその部分に一種の「輕み」とも言うべき表現効果を生み出すことは否定できない。意味や節奏の面で一字一字のウェイトが大きい文言詩のなかに白話系語彙が部分的に混入すること、一首全體の心象や音調にある種の「浮揚感」が生じてくるのである。唐詩に散見される俗語としての「夜來」（yè.lái）「朝來」（zhāo.lái）「晚來」（wǎn.lái）「來」は全て助字の表現効果や存在意義も、おそらくこのあたりにあると考えられる。完全な白話詩のなかで用いられたのでは相殺されてしまつて効果があがりにくいのに對して、文言詩のなかで部分的に使われることによって、詩語「誰家」には新たな視覺的・聽覺的イメージが付加されるのだと言えよう。歴代の知識人たちが白詩に「白俗」（bó.sù）という評語を冠してきたのも、これらの問題と決して無關係

ではないであろう。

白居易は日常生活に直結した俗語系語彙を古典詩のうちに多數導入しているが、そうした情熱を支えるものは、何よりもことばに對する多元的な價值認識だつたと思われる。白居易詩にみられる「誰家」（shui.jia）は、この意味からも彼の詩語觀・言語認識の一端を極めて象徴的に示唆するものであると結論づけられよう。それはいわば白居易における保守的傾向（傳統用法の繼承）と革新的傾向（非傳統用法の開拓）との適度なバランス性と言つてもよいかも知れない。詩人の個性は、詩語の選擇と運用にも明確に投影されていると考えられよう。

〔註〕

- (1) 白居易文學における俗語の意義について論じたものに花房英樹『白居易研究』（世界思想社、一九七一年三月）へ430、444頁があるが、用例の指摘が中心で、①②③の各視點を連結させた總合的な俗語論とはなっていない。今後研究されるべき重要な分野であろう。

- (2) 漢代から唐末までのいわゆる中國中世文學において、「誰家」がどのように詠われているか理解するには、散文・韻文を含めた總合的な文獻調査が必要とならう。本稿では、立論の

ポイントを詩語に置いてあるので、散文ジャンルでの「誰家」用法については、直接言及しない。一定数の資料が集まった段階で、改めて補足したいと思う。

- (3) 詩語「顔色」の用法は相對的に白居易によって完成されたと考えられるが、この点については、小稿「詩語「顔色」の形成とその展開——白居易詩にみられる口語的用法をめぐって——」(『中國文學研究』第八期、早稻田大學中國文學會、一九八二年十二月)を参照されたい。

- (4) 本稿では「誰家」(ダレノイエ)を傳統的・古典的・書面的語的文言系の語彙・語法(基本義)、「誰家」(ダレ)を非傳統的・俗語的・口頭語的な白話系の語彙・語法(派生義)とそれぞれ定義づける。

- (5) 「誰家」(①誰の家②誰)の語義に「怎樣」「怎能」「爲甚麼」「甚麼」などを設定する傾向は張相『詩詞曲語辭匯釋』(上册・「誰家」の條)(中華書局、一九七九年十月)にも認められるものであるが、より正確には基本義から分離した疑問・反語の語法であり、「誰の家」の下位分類の一つとして位置づけるのが妥當であろう。

- (6) 注(3)所掲の論文を参照のこと。

- (7) 清の段玉裁はこの部分に注して「三字爲句、各本少誰字、誤刪之也。敦字下云、一曰誰何也。可證李善引有謂責問之也。五字蓋注家語。」と説く。

白居易詩にみられる「誰家」をめぐって(埤田)

- (8) 同じく段注は「尻、各本作居。今正尻處也。處止也。釋宮牖戶之閒謂之屨、其内謂之家、引仲之天子諸侯曰國、大夫曰家、凡古曰家人者猶今日人家也。家人字見哀四年左傳夏小正傳及史記漢書、家尻疊韵。」と述べる。

- (9) 「誰何」については賈誼の「過秦論」(『文選』卷五十一)にも「據億丈之城、臨不測之谿、以爲固。良將勁弩、守要害之處、信臣精卒、陳利兵而誰何。」とみえ、この語に注して李善は「誰何、問之也。漢書有誰何卒。如淳曰、何、謂何官也。廣雅曰、何、問也。」と説き、張銑は「何、問也。言誰敢問。」と述べている。

- (10) 唐詩で常用される「誰家」對語ヴァリエーションは、おおよそ①「何處」「何地」「何人」「何代」(「何」)、②「幾處」「幾度」「幾處」「幾客」(「幾」)、③「此地」「此屋」「此歲」「此」)、④「客子」「晚節」「明月」「柳市」(單なる普通名詞)、という四つのパターンに分類することができる。

- (11) 「昔、久也。」(毛傳)、「誰昔、昔也。」(鄭箋)、「誰昔、昔也。猶言曠昔也。」(集傳)。

- (12) 「誰家」を使用する詩人としては、謝靈運(2例)、梁簡文帝(2例)、宋子侯(1例)、曹植(1例)、張華(1例)、梁武帝(1例)、江淹(1例)、劉孝威(1例)、劉孝先(1例)、張正見(1例)、陳後主(1例)、陸瑜(1例)、吳尚野(1例)、隋煬帝(1例)を掲げることができる。

(13) この點に關して邊欽立は「古文苑作古梁父吟。不題諸葛亮名字。類聚、樂府詩集等均題蜀諸葛亮作。按李勉琴說曰。梁甫吟。曾子撰。琴操曰。曾子耕太山之下。天雨雪凍。旬月不得歸。思其父母。作梁山歌。蔡邕琴頌曰。梁甫悲吟。周公越裳。按梁甫。山名。在泰山下。據此。梁甫吟不始於孔明。而此辭亦與孔明無關。今附入漢雜曲歌辭中。」(『先秦漢魏晉南北朝詩』二八一頁)と述べる。

(14) 「二桃殺三士」の故事については、『晏子春秋』内篇、卷一、諫下に詳しい。

(15) 徐仁甫編著、冉友僑校訂『廣釋詞』(四川人民出版社、一九八一年五月)も四四二頁で「誰家(家即价)猶「何人」、問訊人之詞。《梁甫吟》問是誰家墓? 田疆古治氏。因田疆、古治氏是二人、知此「誰家」是問「何人」。と説き同様の見解を示す。しかし「梁甫吟」にみえる「誰家」が俗語用法の極めて初期の用例である點については何も言及されていない。

(16) 「補全唐詩」「敦煌唐人詩集殘卷」「全唐詩補逸」「全唐詩續補遺」の四編を指す。

(17) 既刊の「二字索引」については下記の諸書を使用し、その他の詩人の場合は、『全唐詩』『全唐詩外編』を對象にして檢索した個人メモに據る。○『宋之間詩索引』(松岡榮志、東京大學東洋文化研究所、一九八五年十月)、○『駱賓王詩一字索引』(鹽見邦彦、采華書林、一九八二年五月)、○『陳子昂詩索引』

(安東俊六、采華書林、一九七六年十月)、○『王維詩索引』(京都大學中國語中國文學研究室、采華書林、一九七八年一月)、○『王昌齡詩索引』(芳村弘道、朋友書店、一九八三年七月)、○『孟浩然詩索引』(青山宏、汲古書院、一九八一年七月)、○『李白歌詩索引』(花房英樹、同朋社、一九八五年九月)、○『韋應物詩注引得』(湯姆斯、美國亞洲學會中文研究資料中心、一九七六年)、○『岑參詩索引』(新免惠子、中國中世文學研究會、一九七八年九月)、○『杜詩引得』(全三冊)(哈佛燕京學社、一九四〇年)、○『錢起詩索引』(田部井文雄、汲古書院、一九八六年六月)、○『韓愈歌詩索引』(花房英樹、京都府立大學人文學會、一九六四年三月)、○『孟郊詩索引』(上・下)(野口一雄、東京大學東洋文化研究所、一九八四年八月)、○『張籍歌詩索引』(丸山茂、朋友書店、一九七六年十月)、○『李賀詩引得』(艾文博、美國亞洲學會中文研究資料中心、一九六九年)、○『元稹歌詩語彙索引』(花房英樹、彙文堂、一九七七年三月)、○『柳宗元歌詩索引』(前川幸雄、朋友書店、一九八〇年十月)、○『杜牧詩索引』(山内春夫、彙文堂、一九七二年五月)、○『李商隱詩索引』(早稻田大學中國文學會、龍溪書舍、一九八一年九月)、○『皮日休詩索引』(東北大學中國文學研究室、采華書林、一九八三年十一月)。

(18) 「代悲白頭翁」については、劉希夷作とし宋之間として数えていない。また杜牧と許渾それぞれに重複する「石池」詩

は、杜牧の作品として處理した。

- (19) 著名な詩人としては、陳子昂・孟浩然・岑參・李商隱・賈島・溫庭筠・魚玄機らがいる。また元稹・柳宗元・皮日休などの詩人は「誰家」を一例も用いていない。

- (20) 三十六例の「誰家」を含む三十五首の詩題のみを以下に掲げておきたい。なお本稿で引用する白居易詩は全て四部叢刊本『白氏長慶集』（那波本）に據り、その作品番號は花房英樹『白氏文集の批判的研究』（朋友書店、一九七四年七月）所收の「綜合作品表」に基づく。(1)「新樂府、其十二、捕蝗」(136)、(2)「新樂府、其三十九、杏爲梁」(163)、(3)「秦中吟、其三、傷宅」(407)、(4)「續古詩、其一」(665)、(5)「夜聞歌者」(498)、(6)「放言、其四」(896)、(7)「早春聞提壺鳥、因題鄰家」(926)、(8)「東南行一百韻寄通州元九侍御、豐州李十一舍人、果州崔二十二使君、開州韋大員外、庾三十二補闕、杜十四拾遺、李二十助教員外、竇七校書」(998)、(9)「潯陽春、其二、春來」(1021)、(10)「贈韋鍊師」(1024)、(11)「寄微之」(1063)、(12)「客中月」(1587)、(13)「喜山石榴花開」(1165)、(14)「鄧州路中作」(1341)、(15)「聞夜砧」(1287)、(16)「錢塘湖春行」(1349)、(17)「雪中即事寄微之」(2322)、(18)「寒食野望吟」(601)、(19)「臨池閑臥」(2385)、(20)「春盡、勸客酒」(2472)、(21)「夜歸」(2455)、(22)「小舫」(2458)、(23)「有小白馬、乘馭多時、奉使東行、至稠桑驛、湔然而驚、足可驚傷、不能忘情、題二十韻」(2546)、(24)「題洛中第宅」(2564)、(25)「題崔常侍濟源莊」(2606)、(26)

白居易詩にみられる「誰家」をめぐって（埤田）

- 「晚歸早出」(2901)、(27)「天宮閣早春」(2903)、(28)「歲暮」(2972)、(29)「晚春閑居、楊工部寄詩、楊常州寄茶同到、因以長句答之」(3128)、(30)「閑居自題」(3007)、(31)「題文集櫃」(3024)、(32)「哭師臯」(3041)、(33)「清明日、登老君閣望洛城、贈韓道士」(3256)、(34)「追歡偶作」(3398)、(35)「新居早春二首、其二」(3680)。

- (21) 唐代における「家」の虚詞（助字）化現象について、志村良治『中國中世語法史研究』（三冬社、一九八四年四月）は「家は唐代から「誰家」「兒家」「自家」（自分のこと）」「渠家」「人家」（以上『遊仙窟』）があらわれ、「魔家」（維摩變文）、「他家」（『遊仙窟』、杜審言「戲贈趙使君美人」「鶯子賦」などもあらわれる。「自家」（『伍子胥變文』、「嶺山遠公話」）「太子成道經」の「八相變」）は變文に常用される。人稱代詞の付加成分になるのは唐代からと言われる。すべて「家」の原義がなお生きており、性質・身分・職業をあらわす。」(三十八頁)と説明する。

- (22) ①「夫婿」「遊治郎」「白面郎」「羽林將」「少年兒」「君子」「父子」②「紅袖」「折楊女」「懶婦」「少婦」「愁婦」「稚女」「少女」「幼女」など。

- (23) 注(10)を参照。

- (24) 「宿」「搗（練）」「掩（扇）」「負（田）」「落」など。

- (25) 鈴木虎雄註解『杜甫全詩集』（續國譯漢文大成本）（日本圖

中國詩文論叢 第五集

書センター、一九七八年六月）では本詩の冒頭二句を「秋の山に風月の清きころしも笛の音を吹きささぶものがある。あの様に巧みに人の腸をたたしめる様な聲をださせてゐるのはど、家かしらぬ。」（六〇六頁）と譯出するが、「誰家」は文脈からも「誰」と解釋する方が自然であろう。

- (26) ②⑤⑥⑦⑧の「誰家」例については、佐久節「白樂天全詩集」〈續國譯漢文大成本〉（日本圖書センター、一九七八年七月）も俗語用法と指摘している。

- (27) 念のために補足すれば、「何人」と對應して使われる「誰家」が全て無條件に俗語用法であると判定できるわけではない。例えば韓愈の「何人有酒身無事、誰家多竹門可款。」（遊青龍寺贈崔大補闕）、『全唐詩』卷三三九）は「何人」に呼應しているものの、文脈からみて文言系の語法と考えるのが自然である。より重要なポイントは、㉔㉕㉖という三つのスケールにおけるそれぞれの優先順位であろう。

- (28) 「對偶・對句構造による判斷」は、「誰家」が「何處」以外の普通名詞に對應した時、最も効果を發揮する。例えば杜牧の「誰家唱水調、明月滿揚州。」（『揚州三首・其一』、『全唐詩』卷五二二）では、「明るい月」に對應するものとしての「誰の家」であって、白話用法の「誰家^{だれ}」ではない。こうしたスケールは、「文脈（コンテキスト）」との連用で一層効率よいものとなるだろう。

- (29) ㉔㉕㉖三種の「尺度」を用いても判定できない「誰家」は、中間的な用例として處理するのが妥當であろう。より嚴密に言えば「完全なる文言用法」↑「より文言的な用法」「より白話的な用法」「中間的な用法」↑「完全なる白話用法」といった枠組みのなかで「誰家」の問題を捉えていくべきであろう。しかし三つのスケールを相互に應用することで「中間的な用法」の幅を大きく縮小させることが可能と思われる。

- (30) 白居易は四十代（10例）、五十代（11例）、六十代（10例）といった具合に、「誰家」という詩語をこの三十年間に集中させて用いている。またその採用詩型については、五古（9例）、七古（4例）、雜古（1例）、五絕（0例）、七絕（0例）、七言六句（2例）、五律（4例）、七律（9例）、五排（5例）、七排（2例）という状況にあり、絶句詩型に「誰家」を導入しない點が特に注意される。

- (31) 「……竹林雨過誰家宅、楊葉風生何處樓。先問故人籬落下、背容藤蔓繫扁舟。」

- (32) 「……殘月留山影、高風耗水痕。誰家洗秋藥、來往自開門。」
（許渾詩洗秋藥作秋洗藥）

- (33) 「……晴煙和草色、夜雨長溪痕。下岸誰家住、殘陽半掩門。」

- (34) 「一朵又一朵、併開寒食時。誰家不禁火、總在此花枝。」

- (35) 「誰家舊宅春無主、深院簾垂杏花雨。香飛綠瑣人未歸、巢燕承塵默無語。」

(36) 「點塵迢迢未肯和、五陵年少重橫戈。誰家不結空閨恨、玉筍闌干妾最多。」

(37) 「……誰家玉笛吹殘照、柳市金絲拂舊堤。可惜錦江無錦濯、海棠花下杜鵑啼。」

(38) 「誰家長不死、死事舊來均。始憶八尺漢、俄成一聚塵。黃泉無曉日、青草有時春。行到傷心處、松風愁殺人。」